日本ハーディ協会ニュース

NEWS from THE THOMAS HARDY SOCIETY OF JAPAN

第70号（2011年９月１日）

発行者 〒112-8681 東京都文京区目白台２-８-１
日本女子大学百年館高層棟９階９１７研究室内 日本ハーディ協会
編集者 〒586-0043 大阪府河内長野市清見台３-９-19　　渡　千鶴子

ヘンチャードの家のモデルとなったバークレー銀行の前で、演劇学校の生徒たちが『テス』を演じているところ（写真提供：深澤　俊 氏）

晩年のハーディのある午後

深　澤　　俊

多くのハーディの伝記・研究書では、細かく調べるミルゲイトのものを含めて、日付が特定されていないが、ヴァージニア・ウルフの『日記』の注によると1926年７月23日（金曜日）の午後、ヴァージニア・ウルフは夫のレナードとともにロンドンから列車の日帰りで、マックス・ゲイトのハーディを訪問している。この日についてはMacmillan Author Chronologiesシリーズでハーディを担当したティモシー・ハンズは空欄にしているが、エドワード・ビショップ担当のウルフのシリーズには、この訪問が明記されている。ハーディ学者のジェイムズ・ギブソンはマックス・ゲイトの訪問者署名簿から日付とウルフ夫妻の名を確認して、*Thomas Hardy: Interviews and Recollections* にこの訪問について記しているし、この本ではこの日を記したウルフの日記をほとんど

全部引用して載せている。ここで日付が問題なのは、ウルフが記録したのは７月25日（日曜日）の日記なのだが、訪問の日付を記していないからだ。このウルフの訪問記録は、ウルフらしい意識に残った印象の羅列だが、ミルゲイトもギブソンも認めるように秀逸で、ハーディの日常生活の午後のひとときがリアルに浮かびあがってくる。このときウルフはすでに『ダロウェイ夫人』を刊行していて、『灯台へ』を執筆しているさなかだった。『灯台へ』は母ジュリアにたいするウルフのオブセッションから生まれているところがあるが、とうぜんのことながら父レズリー・スティーヴンにたいする思いもつよい時期だった。そしてこの作品にかんして『ミメーシス』のなかで「靴下の寸法測りというようなこまごました些細な出来事を通じで、何という現実の深みが究められていることであろうか！」（篠田・川村訳）とアウエルバッハに言わせた表現が、このハーディ訪問記でも見ることができる。

訪ねていったウルフ夫妻が、子供もなく多くの客人の応対にあきらめているような夫人フローレンスと、あまり歩けなくなった老犬ウェセックスがかみつくなどという話をしていると、グレイの上着に縞ネクタイの愛想のよい老ハーディが、開業医か弁護士のように“Well now―”と言って現れる。そしてハーディがかつてレズリー・スティーヴンをハイドパーク・ゲイトに訪ねたとき、揺りかごのなかのヴァージニア（もしかしたら姉のヴァネッサ）を見ているという思い出話が語られる。『はるか群衆を離れて』では作者ハーディと編集者スティーヴンがともに世間と戦った話も出る。ハーディは鳩のように首を下に向けるが、頭が長くて、話すと目がきらきらする。ウェルズからハーディは空襲を見たくてロンドンに出かけたと聞いたとウルフが言うと、ハーディはそれはフローレンスのことで、『ピーター・パン』のバリーの家にいたとき空襲になって遠くで高射砲の音がして、サーチライトがきれいだったと応える。まったく内輪の些細な話だが、この日常的雑談からは、陰鬱だとか、深刻だとか言われるハーディのイメージはない。そして詩の清書原稿は送ったら、突き返されたりでかなり紛失したが、作品はノートやメモから復元できたという裏話も語られている。ウルフは贈りものとして *Life's Little Ironies* の廉価版に署名をしてもらい、ハーディに屋敷の外まで送られて帰るのだが、贈るのに廉価版しかなくてとハーディが言いわけをすると、ウルフは署名さえいただければ結構ですと応えていたり、ウルフにも何かしおらしい感じすらある。このときハーディは迷ったのかWoolfの名をWolffと書いた。この本はレナード・ウルフの没後、1970年４月27日にサザビーで売りに出されたという記録がある。この訪問記でのウルフには、新時代の小説家としての立場からベネットをやり玉にあげ、ついでにウェルズをも攻撃した文芸批評家としての面は感じられない。ドラブルに言わせれば、ウルフのベネット攻撃には階級的感覚から出ている面がつよいのだが、あの‘Modern Fiction’の調子は私の思うところ、論調というゲーム感覚でなされたものであって、ベネットという作家個人を叩きつぶそうというものではないし、ベネットは攻撃に耐えるだけの大人（たいじん）であることをウルフ自身が承知していた気がする。ハーディにたいするウルフの敬意は、ハーディ没時に*TLS*に発表された‘Thomas Hardy's Novels’で明らかだろう。

そして過ちと言えば、この訪問記でウルフは犬のウェセックスをWesexと誤記しているし、『日記』の編集をしたアン・オリヴィエ・ベルもL[ove's].L[ittle].Ironiesと間違った補記をしている（1980年ホガース版）。この点、ギブソンはウルフの訪問記を間違いなく補って引用しているが、本にして10行ばかりの省略がある。そこに日本の新

聞の「ハーディ特集号」が見せられたこと、東大で講義をしていた詩人ブランデンが話題になったことも書かれている。

その後ハーディの書棚には‘To Mr Thomas Hardy from Eiji Kurosawa Oct. 12th 1927’と献呈のある『鈴木春信画集』が納められた。この画集は現在あるアメリカ人女性の所有になるが、これを発見したミルゲイトは数年前に、このKurosawaに心当たりはないか、黒澤監督のお父さんではないかと私に訊いてきた。たしか黒澤明監督のお父さんの名は勇のはずだ。それっきりで、私はミルゲイトに回答を出せずにいる。

Florence E. Hardy夫人の書簡と そこに垣間見る晩年のHardy

大　榎　茂　行

昨年（2010年）、甲南女子大学図書館が学園創立９０周年記念として所蔵する貴重書の図録を刊行した。その中に「トマス・ハーディ・コレクション」を入れさせて貰い、幾つかの小説・詩集の初版本や、芝居のプログラム、様々な時期の写真、葬儀時の新聞報道写真と共に、特に注目すべきものとして、後妻のFlorence夫人自筆の未公開の書簡があることに簡単ながら言及した。今回ここで、特に夫人の書簡を少々紹介してみたい。

これらの書簡は、総てFlorence夫人が親友Ethel Inglis夫人に宛てた２８通で、差し出された期間は、Hardyと結婚して１年８カ月後の１９１５年１０月１５日から１９２５年５月２２日までの約１０年間、それはHardyの７５歳から８５歳までの晩年に当たる。Inglis夫人については、Michael Millgate；*Thomas Hardy — A Biography*（1982）でも、ただ‘Florence's friend Ethel Inglis’（p. 508）として一度言及されているだけで詳細は分からない。だが、彼女はWeymouth駐留のInglis大佐の夫人で、Hardyを巻き込んでの二人の親交は厚く、やがて大佐の退役と共に一家は１９１７年頃CumberlandのDalstonへ転居した。だがその後も両家の親交は続き、１９２１年頃からは一層親しくなって手紙の書き出しも、‘My dear Ethel’から以降ずっと‘My dearest Ethel’に変わっている。さらにFlorenceは１９１８年１２月２日付のInglis夫人宛ての手紙で、‘My husband often speaks of you & laments your absence. He was sitting up in bed having・・・the lovely Shetland shawl you gave him wrapped round him,・・・he said he was attached to it & he wished you were still at Weymouth. “I have never known anyone who fitted me so well” he continued. “I always liked seeing her. She never tired me.”・・・’と書いている。これらからも分かるように、Hardy夫妻はInglis夫人と個人的に大変親密であり、従ってFlorenceの彼女への手紙には極めて率直な日常折々の心情が隠し立てなく表現されており、それだけHardyとFlorenceの関係も生き生きと浮かびあがってきて、これらはHardy晩年の生活や他の作家の作品に対する彼の意見などをも知る貴重な資料ではなかろうかと思う。そこで１，２例を挙げて見よう。

Florence 自身青春時代から病弱であったことは知られているが、Hardyと結婚してからは精神的にも肉体的にも疲れることが多く、時には医師から転地を勧められたり、

また手術をする必要があったりしたが、それ以上に夫Hardyが歳と共に疲れ易くなり、しかも日々多くの著名な文人・知人が訪ねてくるので、Florenceは寝込むなどもってのほか、自分のことはさておき、常にHardyの健康に留意し、自分に頼り切っている夫に献身的に努めなければならなかった。例えば、'I hate to be so fussy about my own health,・・・it is so awkward for my husband if I have to keep in bed — & of course it is not fair to him to run risks as he does depend on me for so many little things.'（1916年３月９日付）と述べている。

今一つ少し年月を経た１９２２年８月８日付の手紙をみると、FlorenceはJ.Barrieの３幕劇'Mary Rose'より'Dear Brutus'の方が'hopefulness'があって好きだと述べ、夫人の人柄を窺わせる。続けて、'One afternoon three dramatists met here for tea unexpectedly — Granville-Barker, John Drinkwater, & St John Ervine.・・・T.H. went for a cycle ride last week & seemed to enjoy it, & certainly cycled well, but next day fell so knocked up & had to go to bed. People tell me he ought never to cycle again.'と記されている。ここで まず気付くことは、Hardyが８２歳にして大好きな自転車でサイクリングを楽しむその元気さに驚くと共に、さすが翌日はへとへとに疲れ切って寝つき、皆から２度とやらせるべきでないと言われたなどユーモラスではないか。更に上述の３人の若い劇作家たちが思いがけなく訪ねて来たりしているが、彼らは当時ロンドンで活躍中の有名な劇作家・演出家・俳優で、劇の評論家でもあった。Hardyが晩年の１９２０年前後、芝居に興味を持ち、例えば *The Famous Tragedy of the Queen of Cornwall* の他に幾つかの小説の戯曲化を許し、「ハーディ劇団」の俳優たちが上演するのを楽しんでいたが、それには地元の脚色家T.H.Tilleyのみならず、彼らとの親しい交流があったことによるだろう。中でも上記のDrinkwaterは、*The Mayor of Casterbridge* を脚色し、１９２６年９月、ロンドンの Barnes Theatreで上演している。

さらに興味深いのは、Henry Jamesを評して、'My husband dislikes those people in "The Golden Bowl". He says their lives seem so selfish & not worth writing about.'（1916年３月９日）とか、*The Hand of Ethelberta* について'My husband told me to tell you that "The Hand of Ethelberta" was Lady Portsmouth's favourite of his novels & that it was because of the character of Ethelberta that she wanted to know him. Mrs Henniker says that she has grown to like it so much better lately. It was always a favourite of mine, but critics, I know, do not rank it very highly.'（1921年８月23日）などの記載も面白い。その他、G.B.Shaw, J.Moore, J.Galsworthy, A.Trollope, Siegfried Sassoon, T.E.Lawrence, 戦前・戦後の日本の東大や京大、甲南大などで講義をしたEdmund Blundenなど、多くの詩人、小説家、劇作家などについての忌憚のない感想があって興味深い。機会があれば是非甲南女子大学図書館をお訪ねください。

ハーディと私　その後

新　妻　昭　彦

『日本ハーディ協会ニュース』には、「ハーディと私」という長年続いている、言わ

ば老舗の企画がある。これまで多くのハーディ協会会員が、一度はこの「ハーディと私」を執筆したことだろう。私も編集委員を務めた時に、若手（あるいは協会入会間近）の会員への原稿依頼に際して、少なからずお世話になった。いつから始まった企画であるか分からないのは、私がハーディ協会に入会した時にはすでに存在していたからで、私自身の執筆は、協会入会の年の大会後の懇親会場で依頼されたものと思う。武庫川女子大学だった。もうかれこれ十五年以上の歳月が過ぎた。現在の編集委員によって、新たに「ハーディと私　その後」といった企画が始められたとのことで、こうして二度目の機会を得て、あらためて昔のことを思い起こしている。

十五年前の原稿も当時の『日本ハーディ協会ニュース』も見つけることができなかったが、「ハーディと私」というのは、ハーディとの出会いから執筆時までの関わりを書くものであるから、大学の授業でのハーディの小説（『森林地の人々』）との出会いやら、ちょうどその時に封切られていた映画『テス』のことなどを書いたものと思う。修士論文でハーディを選び、やがてハーディ協会に入会することになるのだが、その間、十年以上たっているから、「ハーディと私」を執筆したときの私は、現在の協会の若手の基準から言えば決して若手とは言えない。入会が遅れたということは、年齢の割には、故吉川道夫元会長の言葉を借りるならば、それほど会費を払っている方ではないことになる。吉川先生の急逝の報を聞いたのもこの十五年の間だった。ちょうど吉川先生の勤務校である中央大学法学部で非常勤講師をしており、倒れられる数日前のことも耳にしていたので、なおさら印象深いものになってしまった。そう言えば、『日本ハーディ協会ニュース』編集委員の打診を当時の深澤俊会長から得たのも、中央大学だった。「私で大丈夫でしょうか」と言うと、大丈夫、任期は２年だからということだったのだが、後日、編集委員は同時に運営委員にもなるからとのお言葉を頂くことになり、そもそも運営委員というものが存在することさえ知らなかったため、早速、まずは任期の方から調べてみたのだが、どうやら確たる任期というものはないらしく、こちらの委員の方は現在まで続いている。役員会への出席率から考えても、特にまじめな運営委員であるとは言い難いはずだが、2009年度に大会の開催校を勤めたことが、今後とも最大の貢献であるかもしれない。

修士論文完成後から間をおいて、意を決してハーディ協会に入会した以上、当然、ハーディに関して何らかの研究計画やら研究方針があったはずなのだが、情けないことに思い出すことができない。今、この間に書いた論文を振り返ってみると、すべてハーディ協会との関連であることが分かる。ただ、振り返って、いずれも納得の行く出来というものがない。ひとつの例外もなく、すべて依頼を受けてから準備を始め、しかし発表には厳格な締め切りがあり、そして当然のごとくギリギリになってなんとか間に合わせたものであるからにほかならないのだが、それにしても主題にも方法にも一貫するものが見られないのは、我ながら呆れるほかはない。仮に十五年後に「ハーディと私　その後の後」を書くことがあるならば、もう少しちゃんとした説明ができるようにしたいものである。

『カースタブリッジの町長』論は、獨協大学でのシンポジュームの成果である。入会直後だったが、玉井暲現会長と鮎澤乗光前会長と当時はまだ大学院生だった石井有希子さんとの『カースタブリッジの町長』についてのシンポだった。まだあの頃は、まじめだったなぁと思う。次の『搭上のふたり』論は、学習院大学での「マイナー小説」に関するシンポジュームによるもので、福岡忠雄・佐々木徹両先生とのシンポだった。

関西圏で研究している福岡先生と結びつけてくれたのは、『虚構の田園』の書評のおかげである。『微温の人』論は、日本ハーディ協会創立五十周年記念論集『トマス・ハーディ全貌』のために書いたもの。『二十世紀文学の先駆者　トマス・ハーディ』を手にしていた学生のころを考えれば、三十年後にこうした立派な論集ができるということも、そしてその論集に論文を載せられたということも、感慨深いと言わざるを得ない。『テス』論は、大阪学院大学での『テス』に関するシンポジュームでの発表に基づいたもので、シンポの方は高桑美子先生と上原早苗先生といった津田塾大学（出身）の先生方とご一緒することができた。こうしてあらためて書いてみると、ハーディ協会での活動が、貴重な結びつきをもたらしてくれていることを確認できる。ありがたいことである。

つまり、私の「ハーディと私　その後」は、いろいろな意味で「ハーディ協会と私」の十五年間だったことになるようだ。

ハーディと私

橋　本　史　帆

日本人の私がイギリス文学を学び、そしてトマス・ハーディを研究するとは不思議なことだと感じています。大学に入るまで、イギリスにもイギリス文学にも縁がありませんでした。たまたま英語がほかの教科より得意だったという理由から、進学した大学では英語英文学を専攻しました。まさかこの選択が自分の将来を決めるものになるとは、当時の私には知る由もないことでした。そこで、ここでは、私事の話になってしまいますが、ハーディとの出会いとその関わりについて書いてみたいと思います。

私がハーディに出会ったのは、大学１年生の時に受講した英文学史の授業でした。『ダーバヴィル家のテス』や『日陰者ジュード』のあらすじと、そこに展開される運命論についての講義を聞き、ハーディの作品に魅力を感じたのを覚えています。とはいえ、それからハーディの作品を手に取ることもないまま何年も過ぎ、大学院にすすみました。修士課程の学生だった頃、T.S.エリオットを研究していましたが、私は研究に行き詰まりを感じていました。自分の心に響く作家や作品は何だろうと考えた時、最初に頭に浮かんできたのがハーディでした。何年も前に受けた英文学史の授業で、テスやジュードがたどる人生や運命について知った時、素直に面白いと感じたことを思い出したのです。こうして、私は研究対象をエリオットからハーディへと変えることに決めました。今考えると、なんという無謀なことをしてしまったのかと、恥ずかしくなってしまいます。そして、当時の指導教官に大変なご迷惑をかけてしまったことを反省しています。しかし、あの時の決断が今の私につながっているのも確かです。

それからハーディの長編小説を中心に作品を読み始めました。学部時代からの基礎的な勉強が足りなかった私には、ハーディの英語は非常に難解であり、作品の内容を理解することも容易なことではありませんでした。それでも、ハーディ研究を続けることができたのは、作品が持つ魅力のおかげといえるでしょう。あの陰鬱とした暗いストーリーや、容赦なく主人公を襲い、彼らを悲劇へと導く目に見えない力。作品はイギリス農村の厳しい現実や生きることの難しさ、自分の意志とは違う方向へと人生が向かっていくシビアな人生観を描き出します。子供の頃から、自分の力を超えたものの存在や、

それによって人生が動いているのではないかという漠然とした感覚を私は持っていました。そのためか、ハーディの作品にある「どうしようもなさ」が私の心を捉えて離さなかったのです。

しかし、最近は運命論などからは距離を置いて、作品と海外との結びつきについて研究しています。ハーディが作家として活躍した時代は、イギリスが帝国主義に突入していった時期でもあり、このような社会的状況は作品の背景やプロット、人物造形などに影響を及ぼしています。例えば、『帰郷』の場合、ユーステイシアの父親の出身地はベルギーやイギリスの保護領であったコルフ島に設定されています。このことから、ユーステイシアにベルギーやギリシアの血が流れていることがわかります。『塔上のふたり』のコンスタンティン准男爵は、アフリカへライオン狩りに出かけていますし、『カスターブリッジの町長』のエリザベス＝ジェインとスーザンは、帝国領カナダから帰国しています。そのほかの長編小説や多くの短編小説にも、海外へ移民として旅立つものや、イギリスへ戻ってくるものなどが登場してきます。これらの作品を通じてみえてくるものは、牧歌的な農村社会にも帝国拡大の影響が及んでいたという現実です。さらに、このことは、様々な文化や民族の混合が繰り返されてきたイギリスの重厚で複雑な歴史を私たちに知らせてくれるものでもあります。そういった点から、ハーディの作品は国際色豊かであり、イギリス南部の農村社会は、世界に通じているのだと感じずにはいられません。

こうして、ハーディの作品と海外との関係性に興味を持ち始めてから、ヴィクトリア朝時代の複雑な歴史をみていく作業に追われるようになりました。今は地図や辞書、歴史書と格闘しながら、当時のイギリスとその周辺国との関係を理解しようと努力しています。この研究を始めた頃は、ハーディの作品と海外との結びつきがここまで深いとは思っていませんでした。つくづく、ハーディは多角的な研究の可能性を感じさせてくれる作家であると痛感しています。この新しい出会いを通して、ハーディの研究と19世紀のイギリスがどのようなものであったかを、私なりに明らかにしていけたらと願っています。

HAYII（Hardy At Yale II Conference）に参加して

井　上　澄　子

The Thomas Hardy Association（TTHA）主催で2007年６月に開かれたHardy at Yaleにつづいて、その第２回大会：Hardy At Yale IIが今年開かれ、私も参加してきたので、その概要について報告する。

2011年６月９日～12日、米国Connecticut州New Haven市にあるYale大学のThe Yale Center for British Art と英文科Linsly Chittenden Hallを主会場としてConferenceが開かれた。開会式の冒頭、Dr Rosemarie Morgan（TTHA会長、Hardy at Yale II実行委員長）は東日本大震災へのお見舞いの言葉とともに日本の復興を期待すると挨拶され、またその日本からSumiko InoueとSanae UeharaがこのConferenceに参加してくれていると紹介していただいた。それを聞いて何人かの参加者から「大変だったね、大丈夫か?」とのねぎらいの言葉を受けた。折しもオサマ・ビンラディン殺害のあおりでNew Yorkへの報復テロの懸念が噂された時節であったが、幸い何事も起こらず、予定通り

の日程で無事に過ごすことができた。

Yale大学は、かつてここの准教授であり、著名なHardy学者でもあったRichard Little PurdyゆかりのHardy Collectionを有するので、アメリカでのHardy学会開催には最適の地なのである。

Yale大学の誇るBeinecke Rare Book & Manuscript LibraryのMarble Hallでは、Boston大学のAnna Henchmanのセミナーが開かれ、続いてのBuffet Welcome Receptionでは参加者一同なごやかな談笑のうちにThomas Hardyの特別展を見学して過ごした。この特別展では〝*Far From the Madding Crowd*〟の自筆原稿、ノートブック、*Black's Guide to Dorset*（1896）のためのEmmaとHardyのWessex Novelsの位置を示したhologramなど、またFlorence Hardyの住所録、日記、写真、Eva DugdaleによるHardyの最期を記録した日記など、多数の蒐集品が展示されていた。この図書館はGutenbergの聖書などの貴重な本とともにRichard L. Purdy Collection of Thomas Hardyでも有名で、1753～1981のスパンに及ぶコレクションのうち特にHardyの全盛時代、1880～1927年代のものが充実している。Richard L. Purdy とMichael Millgateによる*The Collected Letters of Thomas Hardy*はこれまで第７巻が最終巻とされていたが、実は2012年に第８巻がOxford University Pressから出版される予定という耳寄りなニュースも聞かれた。その版にちなんで、このたびYCBA（The Yale Center for British Art）のAuditoriumでMichael Millgateと共同の編集者Prof. Dr Keith Wilson（University of Ottawa）が〝The Epistolary Hardy: Volume Eight of *The Collected Letters*〟と題してLectureを行った。「今度こそ、これがfinal volumeとなるはず」として、初期の版には未収録の書簡や、cross-referencing, chronologyその他の資料について、聴衆の笑いを誘うユーモラスなエピソードを交えながらの話が聞けたのが幸いであった。

Touring Wessexのsessionにおいて、Texas大学のJohn Farrell教授は〝Wessex in Five Forms〟と題してHardy小説におけるWessexの自然を分析し、それは審美的な作品を生み出す物質的な題材であるとともに、作家の内面を語る象徴的な要素となったことを論じた。

日本からご一緒した名古屋大学の上原早苗先生は、〝The Profitable Reading of Fiction: Hardy's Extended Creative Process: the Case of Susan and Tess〟と題して発表を行われた。これは〝*The Mayor of Casterbridge*〟と〝*Tess of the d'Urbervilles*〟のHardy自筆の原稿および活字テクストの本文異同を研究することによって、表現の修正が最終稿にもたらした新たな意味効果について、パワーポイントでマニュスクリプトの訂正箇所の実例を映写しながら発表された。これに対するフロアからの質問や意見も多く、好評であった。

10日、LectureはProf. Phillip Mallettの〝'A splendid round bold hand of her own conception': Hardy's letter-writers and the Materiality of the Text.〟があり、11日にはDr Jane Thomasの〝Nights, Nocturnes and Beautiful Lies: Hardy, Whistler and Wilde〟, 続いてDr Linda ShiresのLectureでは〝Text and Image in Wessex Poems〟から12. *Her Dilemma*, 38. *Thoughts of Phena*, 44. *The Impercipient*の再評価すべき名作を抽出し、貴重なイメージのイラストを提示して解説を加え、詩の劇的独白の手法によって神の消失を嘆くHardyの姿を浮き彫りにする。

そしてこのLectureが行われているHallの一方の壁面には美しいステンドグラスが飾られ、そこにはScienceとReligionの対立、それとも和解を思わせる寓意の場面が色美しく描かれている。さらにその両脇に、輝くArtとMusicの存在を表す寓意を配置した

その図柄は、今これらHardyの内面世界を解き明かす研究者の発表とが、うまく呼応しているように感じながら鑑賞したのであった。

Yale Center for British ArtのCuratorでもあるDr Gillian Forresterの〝A landscape *plus a* man's soul' : Hardy's J.M.W.Turner.〟と題する講演があり、パワーポイント映写の画像を駆使しながらTurnerが感動的なイメージを伝達するlightの効用について、TurnerがHardyに及ぼした深い影響を強調された。スクリーンには〝*The Angel Standing in the Sun*〟の光り輝く画面がいっぱいに映し出されている。〝*Turner's Drawing Book*〟の著者であるRebecca Salterの‘Into the Light of Things’を引用しながらよく通る声で説明があり、続いてRuskinの肖像が映し出され、Royal Academyを引き合いにTurnerとRuskinの話に移っていった。

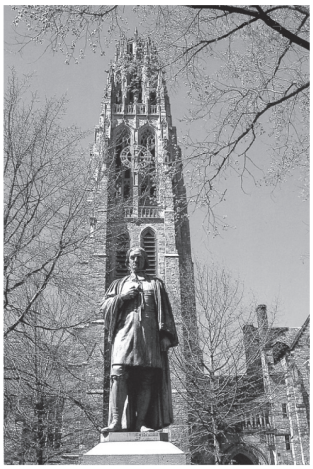
Twin PresentationとしてProf. Rosemarie Morgan（St.Andrews University, Scotland）とProf. Rebecca Mitchell（University of Victoria, Canada）は〝The Resurfacing of Sexuality and Gender : The Millennium Transplant〟のタイトルのもと、二人の対話形式で、しかも会場の参加者にも問いかけるという新しい型の発表が試みられた。これは全員の参加意識を高揚する巧みな方法であろう。

学会も熟した頃のお楽しみは、Boston Symphony Orchestra所属のProf. Douglas YeoのSerpent Presentationで、これはHardyの作品世界でKeywordsの一つとなるMusical Instrument についての解説と演奏による鑑賞によって、Dorchesterでの体験を再現させてくれる一刻でもあった。

'Hardy and Liberty'と銘打つ大学院生のパネルもSexual, political, intellectual and literary freedomなどの各エリアにわたっている。多くのtopicsが約40 sessionsの中で繰り広げられ、またそれに対して活発で率直な意見や質問が飛び交い、清新な感銘を受けた次第。全米のうちでも所得の高い地域と評されるここConnecticut, New HavenのYale大学の環境は、かつてブッシュ元大統領親子二代、クリントン元大統領夫妻らを卒業生に擁する私立名門大学として環境も素晴らしい。折しも６月10日は法学部の娘のGraduation Ceremonyに出席するためにWashington D.C.から訪れたというご夫妻とホテルの朝食の席で一緒になり、〝Congratulation!〟と私は祝福の言葉を口にしたのも思い出す。帰国するとちょうど日本では国際化を加速するために東大が秋入学に移行検討中というニュースを知り、日本の教育界ではその結果の行方が注目を浴びているところである。もしそうなれば、休暇中にHardy at Yale Conferenceに出席可能となる先生方も、今までより増えるのではないかと、そんな期待をしているこの頃である。

リスの遊ぶ広々とした緑のOld Campus、たくさんのCollege間を会場移動するときのLandmarkとなるのは、高さ66mの美しいゴシック建築のHarkness Towerであった。

今回の大会：Hardy At Yale IIにはUSA全土、UK各地、Japan, Canada, Germany, France, Australia, India, Israel, Brazil, China, Hong Kong, Cameroonなど、世界各地から70名が集い、参加者一同、Dr Rosemarie MorganとDr Richard Nemesvariの献身的な貢献のおかげで内容の深さと広がりにおいて、実によくarrangeされたprogramを体験できたことを感謝したい。


Yale 大学のHarkness Tower

≪シンポジウム予告≫
“Impression”から読み解くハーディ

イントロダクション　　金　谷　益　道

ハーディがどのような創作理念に立脚して筆を執っていたのかという問題は、長年批評家を悩ませ続けている。ハーディは、ある批評書では理想化を拒否したナチュラリズムの作家に、別の批評書では主観的な想像力を重視したロマンティシズムの作家に類別されている。創作理念に関する彼自身の論考はエッセイの形でいくつか残されているが、同時代のヘンリー・ジェイムズなどに比べて分量が少なく、論究するテーマに一貫性が欠如しているものも見受けられる。多くの批評家は、このような問題を孕んだエッセイと共に、作品の序文や*Life*に残された断片的で矛盾し合う様々な考察から彼の中心的な創作理念を推測することを余儀なくされ、その結果、文学史や創作理念史におけるハーディの分類の混乱が起きてしまった。ハーディの明確な類別を困難にしてきた代表的な彼の発言のひとつに、“a novel is an impression, not an argument”（『テス』第五版の序文）が挙げられるだろう。この発言は、ヴァージニア・ウルフが関心を寄せたこともあり、モダニズムの到来を予告する作家としてハーディを位置づけようと試みた批評家が拠り所としてよく引用してきた。今回のシンポジウムではこの「小説＝“impression”」論を基軸に据えて、ハーディの創作理念、ハーディとウルフの関係、作品においてこの理念がどう表出しているか、といったトピックで、それぞれ論じてみたい。

ハーディの創作理念と“impression”　　金　谷　益　道

近年の創作理念に関連したハーディの評価は、ナチュラリズム、ロマンティシズムといったキャノンに反旗を翻した作家、キャノンの接合を試みた実験的な作家、新しい理念の創出に腐心した作家、といったものが多く、「実験的」、「先駆的」といった肯定的なことばで彼は評されるようになった。このような評価の根拠として多くの批評家が引き合いに出すのが、彼の「小説＝“impression”」論である。しかし、ハーディ自身の“impression”にまつわる考察は多くなく、また同時代のジェイムズやペイターの“impression”に関する論考と比較すると、断片的なものだと言わざるを得ない。本発表では、なぜハーディに肯定的な批評家たちがこの「小説＝“impression”」論に依拠しようとしたのかと共に、ハーディが何を目的として「小説＝“impression”」論を提示し始めたのかについて論考してみたい。ハーディは“impression”を「“impression”vs. “argument”」という単純な二項対立式の片方の項として考えていたのではなく、複数の異なる理念を統制・接合するツールと考えていたのではないか、またハーディにとって、“impression”とはテクストの生成プロセスにおいて作者のプレゼンスは減殺されるべきだという別の理念を正当化するための方便だったのではないか―このような仮説を立て、論考を進めていきたい。

ハーディの“impression”を読む―V・ウルフの視点から　　高　橋　路　子

ヴァージニア・ウルフの“Modern Fiction”（1925）は、モダニスト作家のマニフェストとして読まれることが多い。ウルフいわく、小説家はプロットや悲喜劇性などの

要素に依存するのではなく、「日常のふとした瞬間に、我々の心が受ける無数の印象（“a myriad impressions”）」を捉えるべきである。そして、このエッセイでは、人間の内面や意識に重点を置いた作家として、トマス・ハーディの名前が挙げられている。この他にも、ウルフは、ハーディの創作理念（“a novel is an impression, not an argument”）に共感を覚えたという趣旨のことを繰り返し述べており、これらのことは、ウルフが、創作面でハーディから何らかの影響を受けていたことを示していると同時に、ハーディがモダニズムの先駆けとして位置付けられることを示している。しかし、“impression”自体が、捉えどころのない抽象概念であることに加えて、とりわけジェンダーの問題などを考えた場合、両作家が想定する“impression”については、より慎重な分析が必要であると思われる。1928年にウルフが発表したハーディ論は、ウルフがハーディの作品を、とりわけハーディの“impression”をどのように「読んだ」のかを知る上で、重要な手掛かりとなる。発表では、ウルフ自身の“impression”を理解する上で重要であると思われる、いくつかの作品を取り上げながら、両作家の“impression”を比較し、分析したい。

トマス・ハーディの「洞穴」—adventure/exploits　　**石 井 有 希 子**

トマス・ハーディ唯一の少年向け冒険譚 *Our Exploits at Westpoley* は、作品それ自体が予想もできないような数々の冒険に翻弄された。ハーディは、アメリカの少年誌 *Youth's Companion* に作品を依頼され1883年に執筆。しかし、実際に作品が連載されたのは9年後、主婦向けの雑誌 *The Household* であった。全集にも収録されず、1952年に出版されるまで事実上忘れ去られ、その後、批評でも等閑視されてきた。だが、ハーディの創作理念とも言える“a novel is an impression, not an argument”を深く考えるとき、この作品は、作者の主張を体現する「革命的」要素が読めるという点で見逃せない。

「カーライルであればクロムウェルと呼んだろう」と言われる中心人物、少年スティーブは、ある日、洞窟の行き止まりの先に＜水源＞を偶然に発見する。この＜発見＞をきっかけに事件が巻き起こる。本発表では、少年たちが直面した事件の向こうに、19世紀半ばのナイル川水源地を求めた命がけの探検、さらに、1870年代のイギリス「土地法」改正をめぐる議論を伏線として読み、スティーブが「直面」したものとは何だったのかを分析したい。作品には当初、副題にadventureが付いていたが、出版された時点でタイトルがExploitsに変わっている。変更の意味を問いつつ作品を読み破るとき、読者は何を「~~みる~~」のか考えたい。

≪特別講演予告≫
ハーディとイギリス・ロマン派

森　松　健　介

ハーディは雑記帳（ノートブック）に「ロマンティシズムは人間性自体が存続する限り、人間性の中に存続するだろう」（*Life*: 147）と記した。また彼の詩の中にはワーズワス、シェリー、バイロン、キーツ、バーンズなどへの連想がしばしば登場する。逆に「仮のものこそ全て」（詩番号２）、「兆しの探求者」（30）、「外部の自然に」（37）、「暗闇のツグミ」（119）など、ロマン派詩歌の脱構築と言ってよい作品も多数残されている。これらについては

旧拙著『十九世紀詩人とトマス・ハーディ』の第２章、第３章などに詳しい。だが今回は詩だけではなく、ハーディの小説や詩劇も大きく取り上げる。ご存知のとおり、この視点はPinionの*Thomas Hardy: Art and Thought,* Macmillan, 1977が少し取り上げているが、Hillis Millerの*The Linguistic Moment,* Princeton UP, 1985は、ハーディ研究者があまり取り上げないようだから、これにも賛同・反論しながら話を進める。またこれまで私がsymposiumなどで述べたロマン派離れのハーディではなく、ロマン派を受け継ぐハーディ像を示したい。

一方、読まれた方が多いと思うがKevin Z. Mooreは*The Descent of the Imagination: Postromantic Culture in the Later Novels of Thomas Hardy,* New York UP, 1990で‘It is not “life” which motivates his [Hardy’s] fictions but “text.” Wessex is a Frankensteinian body of literature wherein the recognizable parts of other bodies of work are stitched together into the semblance of a whole. This semblance never lives as organically cohesive texts do, though it does simulate that life.’と書いた。これはハーディの反リアリズム論としては意味をなす。しかし今回の私の話はこの見解とは衝突する。なお当日ご来聴下さった方には、来年（2012年）秋以降刊の、ロマン派に関する拙著を贈呈させていただきたい。

≪内外ニュース≫

会員の訃報：

本年３月18日に鶴見やよひ氏が、６月25日に富士川和男氏（獨協大学名誉教授）が他界されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

会員による研究書・翻訳書：

小田稔　訳　『英・米・アイルランド短編小説集　残響』（九州大学出版会、2011年３月）

風間末起子　著　『フェミニズムとヒロインの変遷―ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に』（世界思想社、2011年８月）

The Twentieth International Thomas Hardy Conference and Festival：

2012年８月18日（土）から26日（日）まで、ドーチェスターにて開催される。

編集後記

スマートフォンが花盛りで、スカイプなら世界中の人とウェブカメラを使ったビデオ通話もできる。新聞も紙媒体から電子新聞に替えたほうがいいとの声もある。デジタルなら、ディスプレイから記事を表示して、動画や写真もワンタッチ、文字の拡大や縮小も自由自在、超速報（号外）も即座に入手できる上に、過去の記事検索もできる。毎日宅配される紙媒体を一定期間保管しておくスペースも必要ないし、紙が目障りになることもない。けれども落ち着いて味わえるのは、「画面」ではなくて「紙面」である。記事と私との間に介在する物質が邪魔をする「画面」より、直接訴えかけてくる「紙面」のほうがいい。「紙面」なら心に沁みわたるような読み方ができる。織りなされた言葉を心に刻むこともできる。

ご多忙のなか心に訴えかけてくる内容をご執筆くださいました方々に、厚くお礼申し上げます。

次号は４月発行の予定です。原稿の締切日は２月２０日で、論文、随筆は２０００字程度、短信、個人消息は５００字程度です。皆様奮ってご寄稿ください。併せて巻頭写真も募集しております。ハーディに関する著書、翻訳などもございましたら、編集者までご連絡ください。